
不死の兵隊

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死の兵隊

【Nコード】

N6025D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

三十年戦争当時の神聖ローマ帝国。その中を進撃するフランス軍は死者の軍と対峙していた。死ぬことのない彼等に勝つ術はあるのか。実はこの時代は三銃士の時代だったりします。

第一章

不死の兵隊

三十年戦争。ドイツを途方もない戦乱と荒廃に陥れたこの戦争はそもそも宗教戦争であつた。だがその実情はハプスブルク家とそれに対立する者達の間戦争でありそこに宗教が旗印に使われたものである。この戦争にはハプスブルク家である神聖ローマ帝国とスペインの他に新教である諸侯、デンマーク、スウェーデン等が参加した。ところがこの戦争が政治的なものであることを証明するかのように後半にはフランスが参戦してきたのである。

この時フランスは何だかんだと大義名分を掲げていたが要は宿敵である神聖ローマ帝国、ハプスブルク家を叩いておきたかったのである。フランスとそれを治めるブルボン家は神聖ローマ帝国、その主であるハプスブルク家とは激しく対立してきたからである。そうした事情があつたのだ。

こうして戦争に参加したフランスであつたが。ここで思わぬ出来事に見舞われていた。

「それはまことか」

「はい」

当時のフランスの宰相はリシュリユー枢機卿であつた。小貴族の次男から王の母に取り入つてその才覚を現わし今ではこの国の宰相にまでなっている。鋭利な顔立ちに鋭い目、丁寧に三角形に切り揃えられた白い髭を持つ男である。策謀も政治も非常に長けた男である。

その彼が話を聞いているのは腹心のロシュフォール卿であつた。リシュリユーは親衛隊という己の従士達を持っていたがその指揮官でもある。なおこの親衛隊は国王の銃士隊とはライバル関係にあることで有名である。

「戦場はそれによって今混乱しております」

「噂には聞いていたがな」

リシュリユーはその報告を聞いて一言そう述べた。特に驚いていない。とったふうはない。

「まさか本当に出るとはな」

「この戦争は非常に長引いていますので」

ロシュフォールはリシュリユーにそう述べた。見れば痩せていて日に焼けた顔をしている。髭は短く切っておりその目は強い光を放っている。そうしてリシュリユーの前に控えていた。

「そのせいかと」

「それが我等にとつては好都合だったのだば」

リシュリユーはあらためて述べた。

「だが。その副産物がこうして我々に立ちはだかるとなると」

「如何為されますか」

ロシュフォールはリシュリユーに問うた。

「このままでは勝利はおるか戦争さえも」

「わかっておる。解決せねばならぬ」

リシュリユーは取り乱すことなくそう言葉を返した。

「しかしだ」

「何か」

「すぐに解決できるものでもない」

こうロシュフォールに述べるのであった。

「この話はな。まずは調べてみよう」

「お調べになられるのですか」

「そうだ。ああした者達には普通の武器では駄目だ」
こう告げる。

「だからだ。私の方で調べておく」

「それではそれまでは」

「止むを得まい。軍の動きを停止させよ」

進軍を停止させた。

「スペイン軍や旧教の諸侯達が来たら迎え撃て。しかしそれ以外は」

「動いてはならぬと」

「ましてやその者達には手出しするな」
これが厳命であった。

「命が惜しければな。それでよいな」
「はっ」

ロシュフォールはリシュリユーのその言葉に一礼した。

「わかりました。それではそのように前線には伝えます」

「陛下にはわしからお伝えしよう」

この時の国王はルイ十三世である。本人はともかくその周りには謎がある人物である。あの鉄仮面の話には間違いなく関わっているというのがもっぱらの噂だ。

「それでは前線は頼むぞ」

「わかりました」

こうして方針は決まった。リシュリユーはこの日から政務の合間をぬって書斎に籠るようになった。その間前線はロシュフォールが伝えたように動くことはなかった。これはこの戦争に参加している銃士隊についても同じであった。

「あの枢機卿様の御言葉らしい」

「聞きたくはないな」

国王直属の彼等にしてはそうした話であった。青い服を戦場に映えさせて苦々しい顔をしていた。

「動くなか」

「奴等にも」

彼等は口を尖らせて言う。不平を露わにさせていた。

「スペインとか旧教の連中にはいいそうだ」

「旧教ねえ」

なおフランスはカトリックの国である。何十年か前にサン＝バルテルミーの虐殺で新教徒を大勢虐殺したこともある。ナント勅令により宗教的対立は解消されたがそれでもカトリックの国なのはまごうかたなき事実である。

「俺達もそうなんだが」

やはり彼等もそれを言う。

「カトリック同士で争うのもな」

「むしろあの連中の方がな」

「それは言うな」

しかしここで背の高い奇麗な髭の男が彼等を制止した。

「言っても仕方ないことだ。我々は命令に従うのみ」

「そうだな、アトス」

「その通りだ」

ここでもう二人出て来た。紅のマントを羽織った大男と茶色の髪
の白面の美男子であった。彼等の名前をポルトス、アラミスという。
アトスと合わせて三銃士である。

「ここは枢機卿殿の命に従うしかない」

「我等とて不本意だがな」

「その通りだ。それに」

アトスは二人の同僚達に対して述べる。

「実際に戦っても仕方ない」

「全くだ」

「忌々しいことだがな」

二人はアトスのこの言葉にも頷くしかなかった。実際にアラミス
は苦虫を噛み潰した顔になっている。

第二章

「何しろ斬ろうが撃とうが死なない」

「大砲で吹き飛ばしても立ち上がって来るのだから」

「その通りだ。何をしても無駄なのだから」

アトスはまた言う。

「これではどうしようもない」

「そもそもだ」

ポルトスがアトスに対して言う。

「あの連中は何だ？」

「悪霊だ」

アトスはこう答えた。

「そうとしか言いようがない。戦場の悪霊だ」

「そうか。俺も長い間色々な戦場を回ってきたが実際に見たのははじめてだ」

ポルトスもこうアトスに告げた。

「まさかここで出会うとはな」

「いや」

しかしそれにアラミスが異議を呈する。三銃士の中では彼は参謀格である。それだけに今の彼の言葉は重みがあるものであった。

「この戦争ならば当然かも知れない」

「当然だというのか」

「そうだ」

仲間の二人にまた述べた。 8

「この戦争はあまりにも陰惨だ」

「それはな」

「確かに」

アラミスのこの言葉にも二人は頷くしかなかった。三十年戦争はドイツ全土で行われ各地で陰惨な戦闘が行われてきている。街も村

も焼かれ人々はその中で虐殺され惨事は至る所で日常化していた。奪われるようなものは全て奪われ流民で溢れ返り飢餓と疫病が蔓延していた。傭兵達と強盗は何の違いもなく新教徒側も旧教徒側も暴虐の限りを尽くしていた。人が人を喰らうことすら日常化していたとも言われる。そんな戦いであつたのだ。

「それでは。それも有り得る」

「死者が襲つて来るといふこともか」

「私はそう考える」

ポルトスへのアラミスの返事ははつきりとしたものであつた。

「考えたくはないがな」

「しかしだ」

ここでアトスが言う。

「彼等の旗はスウェーデンのものだ」

「そうです」

「確かに」

アトスのこの言葉に周りの兵達が言う。スウェーデンは彼等にとつて同盟国である。ここがまたえらく複雑な話なのであるがフランスは旧教徒であるが新教徒の味方をして旧教徒の総本山神聖ローマ帝国と戦っているのだ。この戦いにおいては所詮宗教はお題目に過ぎなかつたのである。その証明とも言えることであつた。

「それならばどうして我々を襲うのでしょうか」

「納得がいきません」

「死んだらそんなものは関係ないのだろう」

彼等に対して答えたのはポルトスであつた。またやけにあつさりとした言葉であつた。

「所詮はな。俺達と同じだ」

「同じですか」

「俺達の相手はハプスブルクだ」

ポルトスは兵士達に対して自嘲めかして言った。

「それで充分だろう」

「そうですか」

「それならば」

「死んだ奴等にはそれ以上に旗印なぞ関係ない」

ポルトスはこうまで言い切る。

「そういうことだ」

「敵味方関係なくですか」

「つまりは見境なしか」

「奴等を倒すか俺達が死ぬかだけだ」

ポルトスの言葉はまたしてもはつきりとしたものであった。

「どちらがいい？」

「それは決まっていますよ」

「やっぱりそうなる」と

「そうだな」

アトスは兵士達の言葉に頷いてきた。

「戦うしかない。しかしだ」

「奴等はもう既に死んでいる」

アラミスはそこを指摘する。

「だからだ。斬ろうが撃とうが」

「死ぬことはない。どうしたものか」

アトスの顔が難しいものになった。問題はそこなのである。彼等は既にこの世の者達ではない。だから幾ら攻撃しても何の効果もないのである。だからこそ誰もが困惑しているのだ。

「隊長」

その中で見張りの兵士が彼に報告する。

「また来ました」

「数は？」

「おおよそ二千」

「二千か」

アトスはその数を聞いて考える顔になった。それからまた述べる。
「数のうえでは互角だ。しかし」

「ああ」

「奴等は倒れることがない」

ポルトスとアラミスがそこを指摘する。

「だからだ。同じ数でも」

「私達は敗れるしかないのだ」

「そういうことだ。ここは仕方がない」

「撤退されるのですね」

アトスの言葉に兵士の一人が問う。

「やはりここは」

「ここで戦っても無駄な損害を出すだけだ」

アトスは無念そうに首を横に振りながら彼に答えた。

「それならば仕方がない。撤退するしかないのだ」

「無念だな」

「ああ、全くだ」

ポルトスもアラミスもアトスと同じ顔になる。しかし彼等も同じ考えであった。また彼等にしろそれを否定することができなかったのである。理由もアトスと同じであった。

「戦っても意味がないというのならな」

「退くしかない」

「敵がさらに来ました」

見張りの兵士が今度はポルトスとアラミスに対して告げるように声をあげた。

第三章

「そろそろ敵の射程です」

「まずいな。すぐにここを退くだ」

アトスはそれを聞いてまた指示を出した。

「速やかにだ。いいな」

「はっ」

「それでは」

彼等もそれに頷く。こうして止むを得なく兵を退けさせる。その後ろには蒼白な顔や骨が見えている身体、あちこちが腐敗してさえる兵士達がいた。彼等は表情こそないが見るからに恐ろしい得体の知れなさでアトス達に迫っていた。アトス達は彼等の方を振り向かず何とか戦場から去ることができた。しかしこれは彼等にとって
は苦い話であった。

「そうか、今回も逃げたか」

「それしかないでしょうな」

またロシュフォールがリシュリユーに報告している。報告を受ける方は冷静であつたが報告する方はそうではなかった。見るからに忌々しげなものであつた。

「気に喰わぬ連中とはいえ気持ちはわかります」

「敵に戦わずして背を向けることがか」

「はい、彼等も私も剣を手にする者です」

ロシュフォールはあえてそこを強調する。

「それでしたらやはり」

「言いたいことはわかつておる」

リシュリユーはその彼に対して述べた。

「せめて戦つてだな。しかしだ、それは」

「何の意味もないと」

「戦つて意味があるのならば思う存分戦うがいい」

リシュリユーはこうも述べた。

「しかしだ。それが何の意味もないならば」

「退けと。そういうことですな」

「大砲で吹き飛ばしても身体の切れ端が向かって来るそうだな」

「はい」

ロシュフォールはリシュリユーのその問いにも答えた。

「その通りです。だからこそ何の打つ手もないのです」

「そうであろう。そもそも死んだ者がもう一度死ぬ筈がないのだ」

リシュリユーの言葉は素っ気無くすらあった。だがその素っ気無い言葉こそが真実でありどうしようもない現実であった。それは言っている本人も非常によくわかつていることであつた。

「戦つても意味がない」

「全くは」

「今はな」

ここでふと口調が変わつた。

「まだ備えができてはおらんからな」

「備えといえますと」

「おおよそだがやり方がわかつた」

彼は確かな声でロシュフォールに告げた。

「何とかな」

「ではいいいよ」

「うむ、これで大丈夫だ」

どうやらリシュリユーはそれを調べ終えたようであつた。彼の言葉はある程度の自信があるものであつた。

「そうでなければそれこそフランス軍は」

「あの道は通れませんな」

「正直あの道が最もいいのだ」

ドイツ本土へ向かつている最中であり今そこを巡つて主にスペイン軍と激しい戦いを演じている。戦場は丁度ベルギーの辺りである。そこで今その不死の兵達と遭遇しているのである。

「だからこそ三銃士の部隊を行かせたが」

「まさかあの様な者達が出るとは」

「世の中時として有り得ないことも起こる」

リシュリユーの言葉が哲学めいてきた。彼にしる枢機卿である。

だからこそ今の言葉も似合うと共に説得力のあるものであった。

「それが今ただけだ」

「それで閣下」

ロシュフォールはここでリシュリユーに問うた。

「その今を打開する為にも」

「整い次第送らせる」

哲学者から政治家に戻って話をした。

「それでよいな」

「はい。ではそのように」

「準備自体は速やかに終わる」

それがリシュリユーの言葉であった。

「それは安心していい」

「ではアトス達は助かりますか」

「その前にあの三人を失うわけにはいかぬ」

これはフランスを預かる者としての言葉であった。確かに彼も三銃士は好きではないがそれ以上にフランスにとって優れた軍人である彼等を失うという事態を恐れたのである。そうした合理的で鋭利な頭脳こそがリシュリユーをリシュリユーたらしめていたのである。

「そういうことだ」

「それは私と同じことですか」

「だが根本が違うな」

それは認めながらもこう告げる。

「違いますか」

「私は政治家だが卿は軍人だ」

彼が言うのはそこであった。

第四章

「そこに大きな違いがある。卿は軍人として彼等を惜しいと思うな」
「はい」

ロシュフォールは素直にそれを認めた。その証拠に頭を垂れた。
「その通りでございます」

「武人として認めたうえでだな」

「確かに対立する立場にありますが立派な者達です」

それが彼の三銃士に対する評価であった。

「彼等がいなくては張り合いも何もあったものではありませんし」

「卿はその考えであるべきだ」

「有り難うございます」

「だが私は」

リシュリユーは自分の言葉に移った。

「フランスの宰相だ。その立場から見れば」

「才が惜しいのですか」

「彼等の力はまだまだ必要だ」

それがリシュリユーの考えであった。

「これからもな。だから生きてもらわなければ困るのだ」

「そういうことですか」

「それにだ」

彼はさらに言うのであった。

「フランスはこの戦争に勝たなくてはならない」

「この戦争に」

「ハプスブルク家を抑える格好の場面だ。ここで勝てれば」

「後の我が国の栄光は」

「思いのままだ。イングランドも今は足元がぐらつきだしている」

フランスは常に神聖ローマ帝国、イングランドと対立してきた。

その両者を抑えて欧州の覇権を握ることが彼等の望みなのだが二つ

の敵を同時に抱えてきた為にそれは容易ではなかった。しかし今はそれが果たせる絶好の機会であったのだ。あくまでフランスにとつては、だが。

「今ここでやっておきたい」

「それだからこそ」

「彼等の力が必要なのだ。いいな」

「はっ」

ロシュフォールはその言葉に対して一礼する。それからまた述べる。

「それでは準備が整い次第」

「うむ、輸送させよう」

こうしてリシュリユーはフランスの為にアトス達を救うことにしたのであった。その間アトス達は為す術もなく逃げ回っていた。しそうして遂にこれ以上の撤退は戦略的に支障が出る状況にまで追い込まれたのであった。

「ハプスブルク家の奴等の高笑いが聞こえてくるぞ」

野営地において。ポルトスはアトスとアラミスに対して言った。

彼等はテントの中で粗末な酒と干し肉を食べている。それが彼等の夕食であった。兵士達と同じものを口に行っているのであった。

「何もせずとも敵が逃げていくとな」

「だが仕方がない」

アラミスの言葉は諦めのものであった。うなだれて首を横に振るのが何よりの証であった。

「死ぬことのない者達と戦ってもな。何にもならない」

「その通りだ」

アトスもまたアラミスと同じ顔でポルトスに述べた。

「だがこれ以上の撤退は戦略的に支障が出る。これ以上はな」

「しかしだ」

ポルトスがここでまた言う。

「どうすればいいんだ？戦ってもこちらが損害を出すだけだ。大砲

で吹き飛ばしても身体が向かって来てそれで結局は奴等に捕まって殺される。そういうことだったのだ。

「俺達は何もすることができない。何もな」

「それについてだが」

アラミスがここで言った。

「補給物資が本国から来るぞ」

「明日な」

アトスも言う。

「それで何とかできるそうだ」

「そう言って何度同じ言葉を聞いたか」

ポルトスは不満を露わにしてこう述べた。

「けれど全部駄目だったな。斬ろうが撃とうが」

「次もそうだと言いたいんだな」

「あの枢機卿殿だ」

当然ながら彼もリシユリユーが嫌いだ。そもそも国王直属の彼等が彼と仲のいい筈がない。

「俺達がここで死んでくれればいいと思っているのかもな」

「そうでないことはわかっていると思うが」

しかしここでアトスが言う。

「確かにいけ好かない御仁だがそうしたことをするような方でもない」

「そうだな」

アラミスもアトスのその言葉に頷いた。

「だとしたらとつくの昔に見捨てられているぞ。補給もなしにな」

「それはわかっているが」

それでもだ。やはりリシユリユーが好きでないのだ。ポルトスはそれがわかっていて複雑な顔になった。

「だとしたらここは枢機卿殿を信じよう」

アトスは話を纏めてこう述べた。

「三日後その受け取った武器で戦いを挑む。それで無理だったなら

ば」

「フランス本国へ撤退か」

「そうだ。それでいいな」

「うむ」

「それで行こう」

こうしておおよその方針は決まった。しかし自信がないのは変わらない。三銃士もこれで話が終わると思っていなかった。だがそれでもそうするしかなかったのであった。

補給物資を受け取った。三銃士はその物資を見てまずは顔を顰めさせた。

「何だ、これは」

「これは一体」

武器を見てそれぞれ言う。その武器は普通ではなかったのだ。

「これは聖書の文字だな」

「しかも十字架まで描かれている」

そうなのだった。武器や弾薬にそれぞれ聖書の言葉や十字架が刻み込まれていたのだ。彼等はそれを見て目を顰めさせたのである。

「何のつもりなんだ」

「こんなことをして」

「アラミス」

アトスは三銃士の参謀格であるアラミスに問うた。

「どういうことかわかるか」

「いや」

だが彼は残念そうに首を横に振るだけであった。その手にその武器や弾薬を持ちながら。

「私にもわからない。これは一体」

「とにかくこれを使って奴等の相手をすればいいんだよな」

「それは間違いない」

アトスはポルトスにこう答えた。

「それだけはな」

「わかった。じゃあそれでいい」

ポルトスはそれで納得した。

「駄目で元々だ。それならな」

「そうだな。どちらにしろこのままでは何にもならない」

アラミスもポルトスの言葉に頷いた。

「やられる前にだ」

「そういうことだ」

「よし、では全員にこれを配るぞ」

アトスの決断は早かった。何はともあれこれで戦うしかない。だとすればああだこうだと文句を言っても仕方がないことがわかって
いるからである。

「そうしてあの兵達を倒す」

「よし、じゃあやるか」

「この文字や十字架を信じてな」

ポルトスとアラミスはそれぞれ応える。アラミスはその間に自分が
持っている剣に刻まれている文字を見た。そこには悪を倒せとい
ったような言葉が書かれていた。

二日後アトス達が率いるフランス軍は不死の兵達と対峙していた。
まずはフランス軍が攻撃を仕掛けたのであった。

「いいか」

その直前にアトスは部下達に対して声をかけた。

「陛下からお受けした武器や弾丸で向かうぞ」

「はい」

「わかっております」

兵達はそうアトスに対して答える。その言葉も度重なる敗戦で疲
弊した感じである。アトスはそれをすぐに見抜きまずいものを感じ
ていた。

（いかな、このままでは）

「おい、アトス」

だがここで誰かが声をかけてきたのだった。

第五章

「どうした？」

「どのみちやるしかないんだ」

声をかけてきたのはポルトスであつた。彼は冷静な目で戦場にいる死した兵士達を見ていた。その目には何の臆したところもなかった。

「だったらやった方がいい」

「そうだな」

アトスも戦友の言葉に頷いた。こうした時は彼の決断力が非常に頼りになる。それは今までの数多くの戦いでアトスもわかっていることであつた。

「それだったら。やるか」

「まずは砲撃だな」

「ああ」

また戦友の言葉に頷く。

「そうしてそれから」

銃撃の後でパイクと呼ばれる長い槍で刺しごく稀であるが剣で斬る。そうして戦闘の行く末を決定するのがこの時代の戦争の常であつた。

「いつも通りだ」

「わかった。それじゃあ砲撃を命じるぞ」

「頼む」

「銃撃は私が指示を出す」

アラミスも言ってきた。

「それでいいな」

「それで頼む。ではいいいよか」

「ああ、いいいよだ」

「これでどうにかならなければ本当に全てが終わりだ」

三銃士は死してもこちらに向かつて来る兵士達を見て述べた。彼等を退けることができるかどうかは受け取った補給物資にかかっていたのであった。

まずは砲撃だった。ポルトスがそれを命じる。

「撃て！」

「撃て！」

攻撃が復唱され砲撃が行われた。派手な砲声が鳴り響き巨大な砲弾が敵に向かつて撃ち込まれる。それで数人の死せる兵士達が吹き飛んだ。

「どうだ！？」

「やれているか！？」

三銃士は今の砲撃で敵が死んだかどうかをまず確かめた。煙が消え土埃もなくなる。その中で敵兵を見やる。

ようやく敵軍が見えてきた。その有様は。

「いけている」

「動いていない奴がいるぞ」

アトスとポルトスは敵をそれぞれ見て言い合う。見れば確かに完全に動かなくなった敵兵がいる。今の砲撃によることは明らかであった。

「アトス、いけるぞ！」

ポルトスがそれを見て大声でアトスに叫んだ。

「このまま攻撃を続ければ」

「ああ」

アトスも彼の言葉に頷く。

「間違いない、これで」

「退けられるな」

「よし、アラミス」

アトスはこれに勢いを取り戻した。それで今度はアラミスに声をかけた。

「頼む、次は」

「わかつている。ならば」

アラミスもそれに応えて頷く。そうして彼の仕事にかかった。銃を構える兵士達に顔を向ける。その彼等に言う言葉は。

「撃て！」

「撃て！」

ポルトスのものと同じ号令だった放たれるものは違っていた。今度は銃撃であつた。立つて、座つて、寝ての三段で銃撃が行われる。これはこの三十年戦争において今向こうから来ているスウェーデン軍が生きている間に編み出したものである。それを今フランス軍が踏襲しているのである。

三段の銃撃が放たれる。それが生き残っている死者達を撃つ。今度もまた多くの死者達が動かなくなつた。銃の煙の中からそれがはつきりと見える。

「いけているぞ」

「確かにな」

アラミスはアトスに対して述べた。

「間違いない、これで」

「我々は勝つことができる」

それがわかると心強かつた。もう彼等に恐れるものは何もなかった。

「よし、次は」

「槍だ」

今度はアトスの番であつた。アラミスに伝えて言う。

「槍で貫く。それでまた」

「敵を倒せる」

「パイク兵、前へ！」

アトスはすぐにパイク兵達に命令を出した。それに従い途方もなく長い槍を持った兵士達が前に出るのであつた。

アトスはその兵達が前に出るのを見ていた。そうしてそのタイミングを見計らつてまた指示を出す。

「構えよ！」

「構えよ！」

ここでも命令が復唱される。兵達はそれを受けて槍を前に出す。それだけであるが夥しい数の槍はそれだけで恐るべきプレッシャーがあった。それが通じない相手であつてもだ。

不死の兵達はそのまま向かつて来る。そうして彼等も槍を構えるがフランス軍の方が早かった。彼等は為す術もなく槍に貫かれたのであつた。

槍に貫かれると動きを止める。それで終わりだった。

「やはり槍も効くか」

「うむ」

アトスはポルトスの言葉に頷いた。

「これで何の問題もない。後は」

「倒すだけだ」

ポルトスの言葉がきつとなつた。

「それだけだな」

「そうだ。全軍抜刀！」

最後の指示がアトスから出された。

「敵を切り捨て戦いの決着を着ける。いいな！」

「よし、ならば！」

真つ先に剣を抜いたのはアラミスであつた。それに続いてポルトスも剣を抜いた。そしてアトスも。

「全軍突撃！」

「勝利を我が手に！」

最後にフランス軍の突撃が行われた。こうして彼等はようやく不死の敵達を倒すことができたのであつた。

この勝利の報告もロシュフォールによってリシュリユーに伝えられた。やはり彼は自身の執務室においてその話を静かに聞いていたのであつた。

「そうか、倒せたか」

「はい」

ロシュフォールは彼の言葉に対して頷いた。

「無事に」

「これで我が軍は前に進むことができるな」

彼が最初に喜んだのはそこであつた。

「何よりだ」

「それに兵士達の無駄な損害もなくなりました」

ロシュフォールは次にそこを述べた。

「あの三人も死ぬことなく」

「全く以つて何よりのことだ。ここまで上手くいくとはな」

「それで閣下」

ロシュフォールはここでリシュリユーに問うた。

「何だ？」

「あれは一体何処から御考えになられたのでしょうか」

彼がここで問うたのは武器や弾丸に刻み込まれた聖書の文字や十字架についてである。それのおかげで今回の勝利を得られたのであるからこれは当然であつた。ロシュフォールもまた軍人でありこの問いは当然のことであつた。原因と結果がはつきりしないと軍人は納得しないのである。

「あの文字や十字架か」

「はい、あれは一体」

「東の方の国だが」

リシュリユーはそれを受けてロシュフォールに説明をはじめた。

第六章

「日本という国は知っているか」

「日本ですか」

日本という名を聞いたロシュフォールの顔が微妙に動いた。

「そうだ、この大陸の端のさらに端にある島国だな」

「確かあのスペインやポルトガルと関係がある国でしたな」

ロシュフォールはここで顔を歪めたがそれには理由がある。スペインもポルトガルもフランスにとっては敵なのだ。とりわけスペインは国王が宿敵ハプスブルク家なのでその敵対心はかなりのものであった。この戦争においても激しい戦いを繰り広げようとしているところだ。

「よくわかりませんが」

「そうだ、その日本だが」

「我等の敵ですか、彼等と関係があるとなると」

「それもまた違う」

リシュリユーはそれも否定した。

「オランダとも仲がいいらしい」

「ほう」

この時代はフランスとオランダは仲がよかった。元々スペインの領土であったが彼等の重税や新教徒への弾圧に反抗して独立したオランダはフランスにとっては有り難い存在であったのだ。もともとルイ十四世の時代には対立関係に陥ったりしているのであるが。フランスもフランスでとかく敵の多い国である。

「それは中々」

「イングランドともだがな」

「節操がありませんな」

フランス人が最も嫌う国の名が出てロシュフォールの今の言葉が出た。

「全くもって」

「そう思うか」

「そうとしか思えません」

ロシュフォールの言葉はきつかった。

「全く以って」

「確かにそうだがな」

リシュリユーもロシュフォールも自分達のことは都合よく忘れていた。そもそも気にしてすらない。

「しかしだ。今回はその国が役に立った」

「そうなのですか」

「日本では魔物を倒す時にああするらしいのだ」

リシュリユーは語る。

「武器に退魔の文字を刻み込んだり書いたりする。そうして魔物を倒すのだ」

「左様ですか」

「それを応用した。上手くいったな」

「はい、それは何よりです」

ロシュフォールにとってもこれは喜ばしいことに他ならなかった。勝利と三銃士の命が得られたからであるがそれと共に彼にとっても今後そうした者達と出会った場合どうするべきかわかったからである。そうした意味でも非常に大きなことであつたのだ。

「今後も考えれば」

「神聖ローマ帝国の領土は荒廃している」

リシュリユーはそこを指摘してきた。

「それもありだ。またあした者達が出て来る可能性はある」

「そうですね。あれだけ荒廃していると」

既に戦争が起こって久しい。神聖ローマ帝国の荒廃は目を覆わんばかりであつた。何もかもが失われようとしていたのである。いや、既に多くのものが失われようとしていた。

「それは否定できませんな」

「無益な話だ」

リシュリユーは少し溜息をついてから言った。

「無駄に争うとはな」

「確かにそうですが」

ロシュフォールもリシュリユーに応えて述べた。

「ですが戦いによって何かを得られるのならば」

「それ自体は構わない」

冷徹なまでに現実主義者だと言われているリシュリユーである。

戦争もその為の手段として当然と考えていた。新教徒と手を結ぶのもそうだ。しかし彼は無益な話は好まなかったのだ。

「だが。何も得られないならば」

「行つ意味がないと」

「何もかもが無限ではないのだ」

彼はこうも言う。

「それをいたずらに消費するというのはな」

「では我々はそれを避けましょう」

ロシュフォールはこうリシュリユーに進言した。

「そうして勝利を手に」

「そうあるべきだ」

リシュリユーはロシュフォールの言葉を受けてまた述べた。

「常にな。戦争も政治も」

「はい、それでは閣下」

ロシュフォールはここでまた彼に対して言った。

「私も。戦場へ」

「活躍を期待している」

腹心の部下にそう告げた。一見すると何の感情もないがそこにはこの二人だけのものがあつた。既に余計な感情なぞ不要な程の信頼関係があつたからだ。

「そしてフランスに栄光を」

「わかりました」

「それにしてもだ」

話が一段落ついたところでリシュリユーは呟くのだった。

「人の世の中というものはわからないな」

「といいますと」

「有り得ないことが時として起こる」

彼が言うのはそれであつた。

「どうにもこうにもな。今回もまた」

「それが世の中というもののなのでしょう」

ロシュフォールはいささか達観したような言葉をリシュリユーに述べた。

「結局のところは」

「死してもなお戦う兵達もか」

「そうです。彼等は怨みを飲んで死にました」

これは容易にわかることであつた。そうでなければ死んでもまだ戦うわけがないからだ。

「それを忘れられずに出るというのもまた人だからです」

「人だからか」

「人とは不思議なものです」

ロシュフォールはこうも言う。

「時として怨みを永遠に忘れないこともあります」

「そうだな。それはわかる」

リシュリユーも伊達に枢機卿、宰相まで登り詰めたわけではない。過去に様々な陰謀を企てたり自身もその標的になったことがある。自分自身がそうした経験があるからこそわかることであつた。それは黒い意味での理解であつたがそれでもであつた。

「私もな」

「それが出たのが今の話です」

それがロシュフォールの考えであつた。

「それだけのことですが」

「されどだな」

そのうえで言うリシュリユーであつた。

「今度の話は」

「はい、その通りです」

ロシュフォールは今度は主の言葉に対して頷いた。

「そういうことです」

「わかつた。せめて」

そうして言うリシュリユーであつた。

「戦死者は供養してやろう。怨みを飲んで死んだ者達のせめてもの慰めにな」

「そうあるべきです」

三十年戦争は様々な惨劇が繰り返された。その凄惨な有様により国際法が出来上がった程である。その陰惨な戦争の中ではこうした不可思議な話もあつたのである。全ては人の心故に。この話はそれがもとで起こつた話であつたと言えるだろう。

不死の兵隊

完

2007・11・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025d/>

不死の兵隊

2010年10月8日13時45分発行